



あなたのそばに人権相談員がいます!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権プラザ便り [結い]

(公財)東京都人権啓発センター 〒111-0023 台東区橋場1-1-6 TEL.03-5808-9682 (直通)

いのちや人権が脅かされてはいませんか？ 安心していきいきと暮らせるために、必要なことは何？

高齢聴覚障害者は安心して暮らせていますか？



介護福祉士のヘルパーさんから相談を受けました。「ホームヘルパー2級の資格を取った聴覚障害者のヘルパーさんたちと一緒に、同じ聴覚障害者をもった高齢者の支援をやっていきたいと活動しています。ところが、実際には介護サービスを利用する人が少ないんです。どういうふうにやっていったらいいのでしょうか」と。

高齢の聴覚障害者が、利用したくても出来ないかもしれません。制度や利用の仕方など必要な情報が本人たちに届き、きちんと理解されていなければ、また介護サービス利用の相談をしてもコミュニケーションが取れなければ、利用に結びつきません。さらに、たとえば、デイサービスを利用してスタッフやほかの利用者とコミュニケーションが取れなければ、人間関係を築けず、孤立してしまいます。結果として、デイサービスを利用するのを止めて、自宅に引きこもりがちになってしまいます。訪問介護サービスにしても同様です。コミュニケーションが取れなければ、本人がやってほしいことがうまくヘルパーには伝わりません。

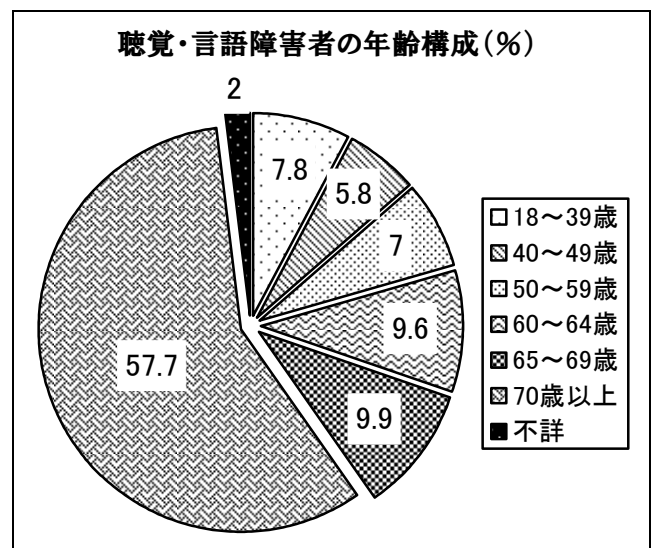
どちらにしても、実際に、高齢の聴覚障害者がどのような生活をしておられるのか、どのようなニーズ(要望・要求)をお持ちなのか、どんなことに困っているのか等々、生活実態およびニーズ調査をすることで実態を把握し、課題を明らかにしていくことが、まず取り組みの第一歩だと思います。「聞こえない」という障害によって、テレビ

やラジオ・電話あるいは隣近所の付き合いのなかで知ることができるさまざまな情報から遮断されています。コミュニケーションや情報がない閉ざされた世界で社会との関わりもなく、孤立を余儀なくされるなかで、命と人権が脅かされていることはないでしょうか。その実態を明らかにしていけば、なぜ介護サービス利用が少ないのかもわかるでしょう。と同時に、それを解決するために何が必要なのかも。

聴覚障害者に占める高齢化率は 67.9%

相談者が住む自治体の障害者計画をみても、聴覚障害者のニーズ調査等はまったく見当たりません。聴覚障害者への主なサービスは、手話通訳者や要約筆記者の派遣などに止まっています。

厚生労働省の調査によると聴覚障害者(身体障害者手帳を有する人)は約343千人(平成18年)。うち、65歳以上は232千人(70歳以上198千人)、67.6%と超高齢化が顕著です。



相談者の話によると、高齢聴覚障害者のための

介護施設は、全国的にみても、特養ホーム（介護保険施設）が6か所（関東近県では埼玉に1か所）、養護老人ホーム（措置施設）が3か所に過ぎません。高齢聴覚障害者のニーズに十分に対応できているとはとても言えないお寒い実態があります。

調べてみると、自治体によって独自の取り組みを行っているところもあります。

北海道の旭川市（人口約35万人）は、「聴覚障害者就労支援事業」として、聴覚障害者を対象にホームヘルパー2級研修をNPO法人に委託して実施しています。

同じ障害を持つもの同士が支え合うピア（仲間）ヘルパーは、当事者にとってはとても心強いサポーターになります。全国的には稀な取り組みですが、ほかの自治体にも広がってほしいものです。

生活支援ということでは、たとえば、大分市では、「高齢聴覚障害者生活支援事業」という、一人暮らしや夫婦のみの聴覚障害者世帯で生活上の困難を自立で解決できない世帯に「生活支援員」を派遣して、彼らの生活を支援していく事業を行っ

ています。

鳥取県では、県の単独事業で米子市において「聴覚障害者生活支援モデル事業」として、日中活動や教養講座を開催する団体への補助を行っています。対象も生まれながらの聴覚障害者だけでなく、中途失聴者や難聴者にも拡大しています。

事業の趣旨のなかで、「社会の中に『居場所』がなく孤立してしまっている聴覚障害者が使うことの出来る社会資源の開発が急務であることから、聴覚障害者の日中活動の機会や集える場を提供することで、お互いの生活を高めあい、健康や生きがいを維持し、自立した地域生活へと結びつけることを目的とする」と謳っています。

今回の相談をとおして、相談者はどんな調査ができるのか、具体的な検討に入ろうとしています。聴覚障害の当事者団体とも連携・協力しながら、高齢聴覚障害者が安心していきいきと暮らしていけるように、さまざまなニーズに応じたサービスや資源の開発に結びつく取り組みになるよう協力していきたいと思っています。

アトピーと引きこもり、心の葛藤は……



アトピーと引きこもりというのは、決して少なくないことだと実感しています。今度は、母親からの相談でした。

長いアトピーとの付き合いのなかで、通院しているかかりつけの病院から、「アトピーがよくなる」と転院してみたら、同じ薬を処方しているのがわかり、期待外れ。また、かかりつけの病院にもどって、アトピーの症状が改善することなく、歳月だけは過ぎてきました。

アトピーから解放されることがない日々、わらをもすがる思いであったものが、いつの間にか絶望的な気持ちになっていくことは想像できます。

以前、アトピーの相談のときに調べて知ったのですが、長く闘病してきた当事者によるピアカウンセリングを行っている「日本アレルギー友の会」や医療機関を紹介しました。

母親はなんとか受診してほしいという思い

で、息子に伝えます。行くそぶりを見せていたといいますが、その翌日から自室にこもってしまいました。

本人は決して自暴自棄になっているわけではありません。「アトピーを治したい」と思っています。体を清潔にするように心がけています。塗り薬も自分で塗っています。にもかかわらず、受診を拒否してしまう。彼の心の葛藤は何でしょうか。

いつも笑顔が絶えない母親は、長年のつきあいで右往左往するわけではありませんが、息子がアトピーから解放される日を念じて、「これは！」という情報をいつも気にかけています。

息子は引きこもりですが、母親の話を聞いていると、快活でコミュニケーションが取れています。自分が必要とされている存在であり、頼りにされるときに、彼の個性は発揮されている様子を聞き、とても心温かくなりました。